

黄色の森

作
河合穂高

登場人物

葵（あおい 33歳）：高校教師。教え子の一人がテロのPTSDにより自殺したのをきっかけに、本人も職務に支障をきたし、現在休職している。今回の登山の発案者。

緑（みどり 33歳）：無職。副業として行っていた接待を伴う夜の飲食業が職場にバレたことで、最終的に事務職を辞して今に至る。葵の亡くなった教え子とSNS上で知り合い、一度言葉を交わしている。

耶麻（やま 33歳）：大学職員（研究職）。テロの現場に居合わせ、男の犯行現場を目の当たりにしている。本人もPTSDに苛まれているが、どうにか一人で持ち堪えながら、大学で研究を続けている。

あらすじ

2020年の秋、幼馴染である葵、緑、耶麻（やま）は、登山で道に迷い、偶然見つけた山小屋の近くで夜を明かすことになった。日は暮れ、森の闇はどんどん深くなっていく。

葵がある生徒の自殺をきっかけに休職していることを告白する。生徒は、2019年に起こったテロのPTSDと、新型ウイルスの自宅待機により、症状を悪化させてしまったのだ。この話を皮切りに、緑と耶麻の秘めた想いが吐露される。

小さな焚き火を囲んで、暗闇に背中をさすられながら、普段なら口にされなかった言葉が溢れ出す。

背景

2019年7月に、東京の花火大会でテロが起こった世界。テロは、花火大会終了直後に勃発。帰宅中の群衆の周囲で爆発が起こり、その直後に犯人である一人の中年男性が、刃物を用いて周囲の見物客に無差別に切りかかった。爆発と刃物による犯行で、2人の人が亡くなり、1人が重軽症を負った。また、一連のテロによりパニックになった人々が殺到したため、商店街や地下鉄の入り口などで群衆雪崩が頻発し、2人の人が亡くなり、150人が重軽症を負う二次災害が起こった。

このテロにより、日本中のイベントが自粛され、ようやくとその空気が緩和され始めた2020年初頭、新型ウイルスのパンデミックが起こり、もう一度さらに厳しい自粛とロックダウンが世界中を覆った。

日本で描かれている場面は、パンデミックが起こった年の秋。

舞台装置

円形舞台。舞台中心部の床材は拘らないが、舞台の辺縁部は落ち葉が敷き詰められ、役者が存在するスペースとは明らかに隔てられている。照明が落ちると中心部だけが明るく、辺縁部の落ち葉スペースは暗いか、暗黒になる。

落ち葉スペースは客席を兼ねており、客席は舞台に取り込まれているようになっていて。観客は、役者たちを取り囲むように座っていて、目を上げれば、観客同士も暗闇の中に、お互いの姿を認めることができる。役者は、奥行きのない闇と、観客に取り囲まれた逃げ場のないスペースで芝居を行う。

※ 役者は客が入る前からすでに舞台上がっていて、常に観客の視線に晒されている。

秋の森。

色づき始めた木々が、暮れゆく空に向かって枝を広げている。

古ぼけた避難小屋がある。地面から突き出した二等辺三角形のような小屋で、トタンの屋根は錆びついている。小屋は非常に粗末なもので、雨風が凌げるといった程度のもので、地面に直接、木製の長椅子が設けられている。

小屋の前に三人の女。

葵は広場の中心にしゃがみ込み、焚き火を熾そうと苦心している。

葵 ……よし。

焚き火に火が入る。

葵 ……点いた、点いた、点いた。 ……見て、点いたよ！

小屋にもたれていた緑はチラッと焚き火の方を見て、すぐに視線を逸らす。耶麻は最初から焚き火を眺めているが、葵の呼びかけに反応しない。

葵 よし、よし、よし。あー、暖ったかい！ ほら、緑、ねえ。

緑 匂いつくから。

葵 そんなん言わずに。これ、助かった。

葵は緑にライターを返す。緑はライターの火をつけたり消したりしながら話す。

緑 散々タバコやめろって言ってた奴が。

葵 ごめんて。

緑 もう吸っていいんすか？

葵 ダメよ。

緑 はあ？

葵 良くないって。今この時代にね、自分で肺にダメージを与えるってナンセンスよ。

緑 ほっといてよ。

葵 (ポケットから何か出して) はい。

緑 なに？

葵 ニコチンタブレット。

緑 もういいって。

葵 欲しくならなかったでしょ？

緑 ……。

葵 いい機会じゃん？ 私もやめられたんだから。

緑 なんでまだ持ってるの？

葵 お守り？ ご利益あるよ？

緑 余りでしょ！

葵 先に試しとききました。
緑 いらなから。
葵 はい。

葵の勢いに引きつつも、緑は結局タブレットを受け取る。

葵 ほら。水。
緑 いい。

緑はタブレットを含んで、自分の水で流し込む。

緑 いつから禁煙警察始めたの？
葵 別に。だけど絶対いい事でしょ？
緑 絶対いい事。
葵 内心辞めたいって思ってたでしょ？
緑 葵がしつこいの。
葵 感謝する日が来るって。
緑 心強すぎ。

呆れて緑は焚き火に寄っていく。

葵 煙の反対側行くと匂い付かないよ。
緑 うるさいな……。おー。あったかいじゃん。
葵 でしょ？
緑 私のライターのお陰ですね。
葵 そうですね。

2人は、黙って火にあたる。薪の爆ぜる音。

緑 マジで今日ここに泊まるのか。
葵 ……。
緑 マ・ジ・で・今日ここに泊まるのか。
葵 うるさいな。
緑 はあ？
耶麻 ……。

耶麻は立ち上がって、小屋の中に自分の荷物を取りに行く。

葵 三人で話し合って決めた事でしょ？ 頭切り替えなよ。
緑 話し合って。葵がね。

葵 あのまま山道降りれた？ ここ見つかっただけ幸福でしょ？
緑 迷ってる時点で不幸なの。誰よ、新しいルート挑戦しようって言ったの？
葵 緑が遅刻して遅くなったんじゃない。
緑 人のせいだよ。
葵 ハイハイ。オッケー。
緑 はあ？

耶麻が小屋から荷物を持って外へ出てくる。

緑？

葵 ……どうしたの？

耶麻 あ…ごめん。中になんかいたから。

葵 え？

耶麻 ネズミかな？

緑 ネズミ？

耶麻 よく見えなかったけど。一応荷物、外に出しといたほうがいいかも。

緑 いやいやいや、無理無理無理！

耶麻 大丈夫だよ。

緑 無理だから。ありえない。ネズミとか。

耶麻 こんな。こんな小ちゃかったよ？

緑 いやでか！ でかいからそれ！

葵 よいしょ。

葵は立ち上がる。

緑 え？ 入るの？

葵 (入りながら) どの辺にいたの？

耶麻 奥の隅の辺かな？

緑 (天を仰ぎ) もー！

葵は小屋に入り、中を探す。

葵 巣とかあったら嫌だけどね。

緑 巢… (絶望)。

葵 人がいたら大丈夫よ。

緑 ……え？ なに？ なんでそんな冷静なの？

葵 時々家にも出たでしょ？

緑 出ないわよ！

葵は小屋の奥へ消える。

耶麻 ……巢ってどんなのかな？
緑 知るかよ。

沈黙。2人は小屋を見つめている。

緑 ……ああ。もう！

耶麻 緑って普段動物とか飼ってないの？

緑 飼わないよ。一人暮らしだし。

耶麻 そっか。

緑は少し小屋から離れて、まだ明るい空を見上げる。

緑 最悪……。雨とか降らないよね。

耶麻 (同じように見上げて) どうかな。

緑 今からでも頑張って帰るとかできない？

耶麻 危ないよ。

緑 そう？

耶麻 道から落ちて骨折ったりとか。はぐれてバラバラになったりとか。日が暮れちゃって森の
中で動けなくなったりとか。

緑 (呻く)

耶麻 見て。あれ。

緑 え？

耶麻 金星。

緑 飛行機じゃないの？

耶麻 違うよ。

緑 ……。

2人はしばらく金星を見ている。

緑 本当に星？

耶麻 ううん。惑星。

緑 ……。

葵 (声だけ) あ！

緑 ……なに！

何かを叩く音。物を動かす音が小屋の中から聞こえてくる。

緑 ちょ、え、なに！

沈黙。

緑 なによ！

葵 ……。

緑 なに！

葵 （声だけ）逃げた！。

緑 なんだった！

葵 （声だけ）分かんない。

緑 （入口に向かって怒鳴る）私の荷物も持ってきて！

耶麻は腰掛けると鞆の中から弁当を取り出す。

耶麻 ……ネズミに食べられる前に、ご飯食べちゃお。

耶麻はアルコールの入った霧吹きで自分の手を消毒する。

緑 弁当持ってるの？

耶麻 （消毒）いる？

やや反射的に緑は掌を差し出す。耶麻は緑の掌にもアルコールを吹きかける。

緑 ……（会釈）。

耶麻 結局麓の店でお昼食べたから。

緑 ー…（よく分かってない）。

葵 まあ、多分逃げたと思う。

葵はそう言いながら小屋から出てくる。

緑 勘弁してよ！

葵 大丈夫よ。ほら。

葵は緑に鞆を渡す。

緑 大丈夫って…（受け取った瞬間ツンときて）くさ！

葵 え？

緑 なにこれ？（鞆をひっくり返したりしながら）やだ。え、なに？

葵 なによ？

緑 変な匂いする。これ。

葵 本当に？

緑 ほら。

葵 (緑の鞆を恐る恐る嗅いでみる) ? ……しないよ?
緑 えー? するよ! これ。(もう一度嗅いで) う。ほら、獣臭い!
葵 えー? (やはり分からぬ) ……緑って、簡単に催眠術かかりそうよね。
緑 プラサボじゃない!
葵 プラセボな。

緑は恐る恐る自分の鞆の中身を確認する。しかし、そもそも蓋も開いていなければ、中に異常はみられない。

葵 大丈夫だって。多分巢なかったし。本当にネズミだった?

耶麻 よく分かんない。

葵 ほら。ネズミじゃないかも。

緑 じゃなかったらなによ?

葵 ……あー、お腹すいた。

葵も鞆からコンビニの袋を取り出す。

緑 え? 葵もあるの?

葵 あのね、山で昼を、食べる予定だったんです。元々。

緑 ……あ。私の遅刻のせい?

葵 ……。

葵は答えずに自分の消毒液を使って手指を消毒する。

耶麻 一緒に食べようよ。

緑 いいの?

耶麻 うん。

葵 私のもあげるわよ。

緑 マジで?

葵 当たり前でしょ?

緑 なんか、……ありがとうございます。

葵 よく考えたら、顧問抜きで山登ったの初めてだった。ちょっと舐めてた。

緑 そうじゃん!

葵 これでもいい?

葵がコンビニのパンを一つ緑に差し出す。

緑 ……はい。

葵 はい、これも。

葵が緑の掌に消毒液を吹きかける。緑は2回目の消毒。3人は2人分の食料を分け合いながら、会話する。

葵 耶麻、それ自分で作ったの？

耶麻 うん。

緑 すごいじゃん。

耶麻 いつも作ってるから。

葵 へー。

緑 あんまり料理のイメージなかった。

耶麻 お金ないだけ。

葵 またそんな。

耶麻 ほら。これ一品。

耶麻は弁当（タッパー）を見せる。あまり美味しそうではない。

緑 ……これ何？

耶麻 レバニラ。

緑 レバニラ！

葵 耶麻……。

耶麻 レバニラ美味しいよ？

緑 そーな。レバニラ美味しいな。

葵 半端ない耶麻感。

耶麻 食べる？

緑 いただく。

耶麻 あーん。（箸で緑に食べさせる）

緑 ……あ！ 美味しい！ 染みるわ……。

葵 ハイカロリー。

緑 パンとは合わないけど。

耶麻 おにぎりもあげる。

耶麻はラップに包まれたおにぎりを緑に渡す。

緑 あざっす。（もらったおにぎりを捧げ仰ぎ感謝する）

葵 胃袋掴まれたなー。（葵は火に木を焼べながら話す）

緑 結婚するわ。

葵 おめでとー。

耶麻はもくもくと弁当を食べている。

葵と緑もそれぞれの食事を摂る。

少し間がある。

緑 さつきは……ごめん。なんか。ほら、きつと栄養とニコチン足りてなかったのよ。

葵 (食べながら) いいよ。私に責任あると思ってる。

緑 でも、久しぶりに言いたい事言った気分。

葵 ?

緑 向こうではもっと大人しいの。

葵 緑が?

緑 うん。

葵 (パンを頬張りながら、目で返事する)

緑 所変わればね。

葵 アンガーマネジメント。

緑 は?

葵 怒りの感情ってね、そんなに長続きしないんだって。腹が立った時に、グッと6秒間我慢すると、それでかなり怒りを抑えられるらしい。

緑 うん……。

葵 だから、さつきもグッと6秒間我慢すればよかったわけ。

緑 いや、あんた全然マネジメントできてないよ?

葵 自戒も込めてね。

緑 なんそれ。

葵 でも事務とかでおとなしかったら舐められるんじゃないの?

緑 ……(おにぎりを齧る)。

葵 仕事こそさ、あんたらしき発揮すればいいじゃん。バシバシっと言いたいこと言ってる。

緑 (口に物が入っているためなのか、返事しない) ……。

葵 テレワークとかになった?

緑 は?

葵 や。ほら、授業とかもオンラインになってたからさ。

緑 ……。うん。……でもさ、もしうちの時にオンライン授業なったら、すごい恩恵あっただろうね?

葵 へ?

緑 いや、改めてどえらい田舎だと思って。

葵 ああ(パンを食べる)。

緑 片道2時間とかさ。信じられんよね? バスの中でなにやってたんだろう。

葵 (頷いて同意する)

緑 だからさ、学校オンラインだったらメツチャ楽だったろうなど。

葵 確かに。

緑 家にいたまんま授業受けれんのよ? 最高やん。

葵 ……。

緑はおにぎりを食べる。葵もパンをかじる。耶麻は足元に「何か」を見つけ、箸を休めている。

暫しの間。

葵 ま、奇跡ってことかな。

緑 は？

葵 感謝してんの。

緑 なにを？

葵 こんな隔絶された場所で、同級生がいてくれたことに。この3人は特別。

緑 ……あのさ今日、そういう発言多くない？

葵 いや、実はね……

緑 キモいよ？

葵はカバンに手をかけ何かを出そうとするが、その前に緑に切られてしまう。

葵 酷！ 耶麻もそう思うでしょ？

耶麻 え？ ……うん。

葵 ほら。

緑 今の生返事じゃん！

葵 嘘お！

耶麻 ねえ。これ。

葵 え？

耶麻は、自分の座っていた倒木の側に落ちていた「何か」を拾い上げる。

葵 ……うわ！

緑 え？

葵 見ない方がいいよ。

緑 はあ？

耶麻が拾い上げた「何か」は、ネズミの死骸だった。

緑 ……（ネズミを見つけて）ぎゃー！

耶麻 やっぱいたね。

葵 なに持ってんのよ！

耶麻 最初、何か分からなかったから。

緑 正気？

耶麻 え？

緑 病気になるよ？

耶麻 なんの？

緑 なんの?!

葵 ……早く捨てな。

耶麻 うん。

耶麻は立ち上がって、そのまま死骸を茂みの中に持っていく。

緑 はー（恐怖で声にならない）。

葵 ビビった。

緑 頭がおかしい。

葵 最初何か分からなかった。

緑 触るとか考えられん。

耶麻 ……。

耶麻は茂みにネズミの死骸を捨てた後も、そのまま森を見つめている。

緑 触れる？

葵 いや流石にちよつと。すごいよ。…って、耶麻？ どしたの？

耶麻は相変わらず、森を見つめている。

耶麻 （すぐに気がついて）ううん。（戻ってくる）

葵 ありがとね。

耶麻 シュッシュッして？

耶麻は葵に掌を広げる。

葵 あー、はいはい。

葵は再びアルコール消毒液を取り出し、耶麻の掌に吹き付ける。

耶麻は少し念入りに手を擦り合わせ、パタパタと乾かす。

緑 なんで平気なの？

耶麻 皮膚から感染しないし。

緑 ……ちゃうねん。そういうことでなく。

耶麻 触り慣れてるし。

緑 どゆこと？

耶麻 実験でさ。

葵 やっぱネズミ使うんだ。

緑 使うって。実験？

耶麻 大学で研究してるから。

緑 ……え？

耶麻 あ。（弁当を指して）ほらこれ、肝臓。私の研究テーマね、体の外で肝臓作ることなの。

緑 (葵を見る) ……?
 葵 私も分からんよ。なにそれ?
 耶麻 ん?
 緑 なんてそんなことするの?
 耶麻 便利じゃん。あったら。なんかあっても交換できる。
 緑 アンパンマンやん。
 耶麻 あれは顔。
 緑 おんなじよ。
 葵 そんなことできるの?
 耶麻 まだ移植とかはできないよ。でもそれっぽいものはできる。完璧には程遠いけど。
 葵 できるんだ。
 耶麻 オルガノイドって言うの。
 葵 オルガ……?
 耶麻 ノイド。体の外で作る臓器のこと。
 葵 なにそれ? 英語?
 耶麻 うん。Organ (臓器) に noid (もどき) のようなもので「臓器もどき」みたいな感じ。
 葵 へー。
 緑 昔さ、ゾイドっておもちゃあったの知ってる?
 耶麻 ?
 葵 え、音? 音が似てるって言いたいの?
 緑 急に思い出して……。
 葵 どうやって作るの?
 耶麻 細胞がくっ付かないようなシャーレにね、細胞撒いて、コロコロ、コロコロ、雪だるまみたいになっちゃうとずつ大きくしていくの。
 緑 シャーレってなに?
 耶麻 え? こんな、平べったいお皿みたいなやつ。この中で細胞育てるの。
 緑 そんなんで肝臓できるの?
 耶麻 いや。全然だめ。
 葵 ダメなんだ。
 耶麻 ダ・メ・な・の・よ! ……あのね? レゴ知ってる?
 緑 おもちゃ?
 耶麻 あれね、ブロックバラバラに沢山あっても何にもならないでしょ? 誰かが組み立てるか
 ら家になったり車になったりさ。
 葵 うん。
 耶麻 それと同じ。ちゃんと意味のあるように組み立てないとね。誰かが。
 緑 ほう。
 耶麻 これが難しいのよ。シャーレにまいたってシートみたいにしかならない。これを工夫して
 三次元にしても、やっぱり生体のような肝臓にはならなくて。だけど面白いのは、その不完全
 な細胞の塊を、マウスの体の中に移植してやると、なぜかちゃんとした肝臓になって大きくな
 る。

緑 あーん！

耶麻 不思議でしょ？ 多分、体のネットワークなんだよ。肝臓の細胞だけじゃなくなつてき、いろんな相互作用が臓器の大きさを決めてんだらうね。

葵 ……。

緑 ……。

耶麻 聞いている？

緑 え。じゃあこのレバニラって……！

葵 え！

緑 オルガノイド！

耶麻 違う違う。これは豚の肝臓。買ってきたやつ。

緑 本当に？

耶麻 本当だって。まだそんなことは出来ない。

緑 よかったー。なんか、よかったー。

辺りはかなり暗くなってきた。いくつか星も見え始める。

耶麻は食事を続ける。

緑は食事が進まず、火を見ている。

葵は引き続き焚き火の世話をしている。

緑 寒……。

葵 小屋入る？

緑 入るわけないでしょ？

葵 まだ言ってる……。

緑 あのだ、本当に何にも感じない？ これ（カバン）とか私の鼻が変なの？

葵 えー？ どう？

耶麻 （鼻を鳴らして）……生臭い？

緑 お！

葵 レバーでしょ。

耶麻 あー。

緑 ……もういい。今日このままここで寝る。

葵 寝れんでしょ？

緑 中でも寝れないよ！

葵 私が起きとくから。

緑 葵、寝ないの？

葵 一応責任感じてるんで。

緑 えー。それで明日大丈夫？

葵 大丈夫よ。ここまでできたら大体道わかりそうだし。ね？

耶麻 うん。

緑 ま、それでも入りませんがね。

葵 凍えるわよ？

緑 ネズミよりまし。
葵 ……好きにしたら。

パチパチと火の爆ぜる音。
黙り込む3人。

緑は鼻をすすっている。
緑は手持ち無沙汰なのかスマートフォンを取り出して、焚き火の写真を撮る。
カメラのシャッター音。緑は何回かそれを繰り返す。
シャッター音が妙に大きく響く。

葵 何枚撮るのよ……。
緑 意外と難しい。
葵 電池温存しといてよ？ どこで繋がるか分からないだし。
緑 ……はいはい。(画面を見て) 圏外です。
葵 ……。

耶麻はカバンから自分のスマートフォンを取り出し、いくつか操作をして葵に渡す。

耶麻 ほら見て？

葵 え？

耶麻 画面。

葵 (画面に目を落とす) ……なにこれ？

緑も葵からiPhoneを取り覗き込む。

緑 うわ。なんか、すごい回ってる。

耶麻 すいでしょ！

緑 え？

耶麻 それね、方位磁石。

緑 あの北とか南とか指す？

耶麻 そう。

葵 めっちゃ狂ってるやん。

緑 ……あ！ あの賞のやつ？

耶麻 そうよ！ 中学生の自由研究、「サナガワ村の磁気の分布について」。

葵 どういうこと？

耶麻 そもそもね、こんなクソマックスミラクルど田舎に、なんで集落なんてできたと思う？

葵 さあ。

耶麻 ここはね、昔鉱山だったのだよ。ちょっとただけだけど砂鉄が取れた。

葵 そうなの？

耶麻 うん。緑の名字ってさ、砂を分けると書いて、砂分(すなぶ)でしょ？

葵 うん。

耶麻 この苗字は砂から砂鉄を分ける人たちに付いた職業の名前なの。

緑 なんかあったな。それ。

耶麻 だから変な名前なの。

緑 おい。

耶麻 そんな感じでき、川沿いの集落で名字の分布を見るだけでも、実は結構オモシロかったりする。どういう風に鉱山が作られていたとかさ。これは高校の自由研究。

緑 それもなんかしてたよね？

耶麻 街で発表させられた。

緑 懐かし。

葵 え？ それで、何なの？

耶麻 だからさ。結局山全体が鉄を多く含んでいるので磁力が発生する。だから磁石が狂っちゃう。もちろん携帯もつながらない。この発表のとき、担任のあの人。すごい反論みたいなのしてきてさ……

葵 待ってよ。

耶麻 ？

葵 じゃあ耶麻はこの山でGPS使えないの知ってたの？

耶麻 ？ うん。

葵 は？

耶麻 え？

葵 なんて言わないのよ！

耶麻 知らなかったの？

葵 知らないわよ！ 見てたら分かるでしょ？ そういうことだったらもっと早く別の方法考えられたじゃない！

耶麻 え……。だって……。あの時すごい褒めてくれてたのに。

葵 いやいや。中学でしょ？ 覚えてるわけじゃないじゃん！ え？ なんて？ というか、私が困ってるの見てなんも思わなかったわけ？

緑 葵さん。

葵 は？

緑 6秒、6秒。

葵 ……！

葵 は言葉を飲み込み、大きく深呼吸をする。

しかし葵は、こみ上げる感情をうまく飲み込めないようだ。

葵 ……。ちよつと薪探してくるわ。

葵 は立ち上がる。

緑 はーい。

葵は暗闇に消える。

耶麻 ……ごめん。

緑 忘れるあいつが悪い。ま、私も忘れてたけど。

耶麻 ショックだ。

緑 そんなん覚えてないって。昨日のことだって怪しいよ、私は。

耶麻 本当に？

緑 (相手にせず) てか重おも。このアイフォン古過ぎ。

緑はスマートフォンを耶麻に返す。

耶麻 葵、一人で大丈夫かな？

緑 大丈夫よ。

二人は葵の消えていった闇を見つめる。

緑 あー。まじで今日どうしようかな。

耶麻 寝る場所？

緑 あの中に入りたくない。

小屋の入り口も、森とは違うまた闇。

耶麻 昔登山部でキャンプしたじゃん。

緑 テントの方がマシよ。

耶麻 でも確かに、私も今日は小屋の外にいるつもりだった。

緑 え？ なんで？

耶麻 ちょっと、今、狭いところ苦手なんだよね。

緑 ? どういうこと？

耶麻 (無言で首を振る)

緑 ん？

緑は急に表情を強張らせ、何かを見つけたように立ち上がる。

緑 ……。

耶麻 どうしたの？

そのまま緑は焚き火から離れる。

耶麻の表情は不安で曇る。

耶麻 どこ行くの？

緑は返事をせずそのまま行ってしまおう。
沈黙。

夜の音が深くなる。

耶麻は一人、焚火の前に取り残される。
暫くして耶麻が堪らず緑を呼ぶ。

耶麻 ……緑！ ……緑！

足音がして、緑が戻ってくる。

緑 ごめんごめん。

耶麻 どうしたの？

緑 月だった。

耶麻 月？

緑 その木の向こうに何か光が見えて。

耶麻 (指された方を向く)

緑 月が出てんのよ。

耶麻 月……。

緑 すごい明るくて、何かと思った。

耶麻 急に行くから驚いた。

緑 なに？ 怖かった？ ごめんごめん。

耶麻 ……。

緑 ちよつとき、違うものだと思って。

耶麻 え？

緑 あの……。黄色い飛行船って知ってる？

耶麻 え？

緑 黄色い飛行船。……知らないか？ いや、いい、いい。

耶麻 ……飛行船。え、それって。

耶麻はスマートフォンを操作して、中の写真を開いて緑に見せる。

緑 そう！ え？

耶麻 大学の窓から見えたんだ。

緑 わ。なんか。見た人に直で会ったの初めて。

耶麻 え？

緑 私も見たの。

耶麻 そう。

緑 最初の時は、ちようどね、会社の上を飛んでて。

耶麻 へー。

緑 びっくり。めっちゃデカイよね？ これ。

耶麻 そうだっけ？

緑 その時一人でお弁当食べててね、屋上で。

耶麻 屋上？

緑 うん。ほら、これこれ（タバコの仕草）。で、急に暗くなったから何だろうって。そしたら、

こいつが浮いてたのよ。

耶麻 突然？

緑 うん。全然気がつかなくて。最初、え、なにっ！ て。あれ。六本木ヒルズくらいあるよ。

耶麻 嘘だ。

緑 ホントだって。

耶麻 でも。確かになんか、違和感を感じたかな。

緑 なに？（今までになく真剣）

耶麻 え？ なんか変な感じじゃん？

緑 うん。

耶麻 その。結構長いこといたでしょ？ 何するでもなくさ。街の上に静かにそれが浮いてるっ

て、形なのかな？ 有機的っていうかね？ 生き物みたいなさ。私、その時なんか知らないけ

ど、海の中、一人でぼーっと浮かんでる深海魚思い出して。深海魚って、普段ほとんど動かな

いんだって。体力温存するのにさ。生きてるのに、ずっと動かない。死んでるみたいに。

緑 ……耶麻、やっぱ天才。

耶麻 え？

緑 私もその感じ、すごい言いたかった。

耶麻 え？ これを？

緑 うん。生き物っぽくて、だけど死骸みたいな気持ち悪さもあって。どこにも繋がらずに浮か

んでるって。なんかすごい言い当ててると思うよ。

耶麻 あ、ありがと。

緑 私も、そんな風に素直に言葉にできたら良いのになあ。

耶麻 えー？

闇の中から足音がして、葵が光の中に戻ってくる。

戻ってきた葵の表情は、まだどこか暗い。

緑 お疲れ。

葵 うん。

葵は無言で集めてきた枝を薪のそばにばら撒く。

緑 大丈夫？

葵 思ったより視界悪かった。

葵の左手に何かが付いている。

緑 ……ちょっと、葵、それ、手、なに？
葵 ん？

葵の手は、血に濡れている。
炎に照らされた血の色は、赤というより黒に近い。

緑 大丈夫?!
葵 ……血だったのか。なんかヌルヌルすると思った。
緑 ヌルヌルって……!

葵は指先を舐める。

緑 やめなよ。
葵 さっきなんか引つ掛けたと思ったのよ。絆創膏持ってるし。
緑 ちょっと。ちょっと待って。

緑は急いでスマートフォンライトで葵の手を照らす。LEDの人工的な白い明かりが、葵の掌を白く照らし出す。血の色がとても鮮やかだ。
葵は、自分の水で指先を洗い、絆創膏を貼る。
緑と耶麻はそれを手伝う。

緑 痛くなかったの？
葵 うーん。
緑 ねえ。
葵 うん。

葵はどこか上の空で絆創膏を貼った指先を見ていたが、すぐに薪を拾って火の世話を始める。
薪が焼べられたことで、一瞬火勢が増し、3人の顔が明るく照らされる。
短い沈黙がある。

緑 大丈夫？
葵 うん。
緑 ……。(葵の様子を少し観察してから明るい声で)ね。葵も知ってるでしょ？ 黄色い飛行船。
葵 え？
緑 これよ。

緑は耶麻のスマートフォンの写真を見せる。

緑 去年の夏くらいから、話題になってた。

葵 (焚き火の世話をしながら) しらない。

緑 え、うそ？ この飛行船ね、身元不明なの。

葵 ふーん。

緑 広告も何もないでしょ？ フラツと現れて、何処かへ去っていく、謎の巨大飛行船。

葵 嘘くさ。

緑 ニュースにもなったんだって。

葵 耶麻も見ただの？

耶麻 うん。

緑 なんか怖いよ。

葵 怖い？

緑 ね？

耶麻 怖いって言うか……、私は、見慣れない感じ？ 何だろうって。……なんか蜃気楼とか

思ってるね。写真撮ったの。

緑 (頷きながら) 分かりみがあるね。

葵 ?

緑 現実感ないのよ。気付いたらこれが浮いている。どのくらい近くにあるのかも分からない。遠

いのかも。のっぺりとして、ベタツとして。何故か全部黄色で。

葵 ふーん。

緑 変でしょ？

葵 まあ……、私は見てないから。

緑 おかしいな。Twitterとか結構盛り上がったんだよ？ 新型兵器とか。またテロなんだとか

ね。葵、Twitterで見なかった？

葵 え。……うん。やってないから。

緑 え？ あー。あ。そっか。世間的には結構忘れられてるのかな？

葵 ……。

沈黙。

葵の手が止まっている。火は、また元の大きさに戻っている。

夜の闇は力を増し、3人はそれぞれの思考に沈む。

虫の声。火の爆ぜる音。

葵 今日、本当ごめん。全部私のせいだよね。

緑 ……なに？

葵 そうでしょ。よく分からないのに新しい道選んで。迷ってさ。

緑 どうしたのよ？ 火見てたら悲しくなっちゃった？

葵 本当だったら、今頃ビール飲んでた。

緑 それは……確かに最高だったな。までも、こういう脱社会みたいな。たまにはいいんじゃない？

葵 ……。

緑 今さ、なんか知らんけど結構心穏やかなんだよね。スマホ断食のせいか、禁煙のせいかわらんけど。こんなにもしない…、んーてか、できないのって久しぶり。外国みたい。

葵 ……。

緑 だからま、そんな謝んなよ。

葵 ……ごめん。

緑 (笑って) 一生忘れんけどなー？

緑が少し強めに葵を小突く。

葵 (小さく呻く) ……。

葵の顔が痛みで歪む。いつの間にか、葵は涙ぐんでいる。

少し間があって、2人は葵の異変に気がつく。

耶麻 ……葵？

緑 ……え？ ……嘘。

葵 ごめん。

緑 私？ え、冗談だよ。別に、本当にそんな何も思っていないから！

葵 違う。違うのよ。ごめん、本当。

葵、しかし、涙が止まらない。

緑 ちょ、わわわ、どうしよ。いや、というかそもそも私が遅刻したのが最大の原因なんだしさ。

え？ マジで？ やめてよー。

葵 待って…ああ、もう。だっさ。恥ずかし。

葵は涙を拭い少し感情を整える。

葵 ……なし。なしなしなし！ ちょっと薪取ってくるわ！（葵は立ち上がる）

緑 え？ ちょ、待ってよ！ 危ないって！

耶麻が立って、葵の腕を掴む。

耶麻 葵？

葵 ……私のせいなのよ！

耶麻はゆっくりと葵の腕を離す。

葵 違う。…緑がとか、そういうことじゃなくて。というか、…今日のことでもなくって…

…。

耶麻 ……どうしたの？

葵 ……。

耶麻 葵？

葵 ……教え子にね、なんていうか、すごい仲良しの生徒がいたの。ラインも交換したりして、結構色んな話聞いてた。似てたんだよね。昔の私に。すごいシンパシー感じてさ。時々私の机にやってきて、長く喋ることもあって。

緑の顔色が変わる。

葵 その子ね、あの花火大会に行つて、テロに巻き込まれたの。

耶麻 え？

葵 現場からは離れてたから、切りつけられたりとかそういうのはなかったんだけど。地下鉄の入り口で身動き取れなくなつて。その日ね、その子、親友と一緒に。だけど途中ではぐれちゃつて。解放されて、友達探して、だけど連絡が取れなくて。一晩中探し回つたらしいんだけど、結局、その友達、商店街の将棋倒しに巻き込まれてたの。

風が吹き、背後の森が揺れ、一緒に闇も動く。焚き火がパチパチと音を立てる。

葵 病院に行つたら、その子ね、一人で立つてた。あのね。どういうわけか、その子の親はすぐに連絡がつかなくて。先に相手の親が来てね、一部始終全部見ちゃつたんだつて。一人で、家族が遺体に縋り付くの。ずっとずっと。その子ね、すっかり変わっちゃつた。自分を責めて。自分のせいだつて、ボロボロになつて。違うよつて。あなたは逃げて正しかったし、友達だつて同じように逃げたんだから。友達は運が悪くてあんなことになつたけど、それはあなたのおかげじゃないつて。心療内科にも通つて、私も他の教員も、親御さんもみんなサポートして。少しずつだけど、持ち直してた。そんなふうに見えたの。学校にも来れるようになって、他の生徒とも話せるようになって。少しだけど、笑うようになってた。前みたいに私ん机までやって来て、私頑張るからつて話をして。うん。私たちみんないるからねつて。季節が変わつて、ニュースも段々少なくなつて。学校も少しづつテロから立ち直り始めた。年が明けて。冬休みが終わつて…でも途中で休校になったでしょ？ ウイルスのせいでき。再開しても、生徒は職員室入室禁止で、前みたいに会えなくなった。電話で話したら元氣そうだったし、大丈夫かな。元氣になったのかなつて。そう思つてたの。そしたら、ある朝、起きたら、その子から着信が入つてた。一回だけ。時間は夜の2時。すごく嫌な感じがした。したらまた着信が入つたの。…警察からだった。

焚き火の照り返しが、葵の濡れた頬を光らせる。

葵 私ね、そこから授業できなくなつちゃつて。対面で授業してると、どうして私、あの子に直接会いにいかなかったんだらうつて。なにを恐れて、私はあの子と顔を合わすことを避けてたんだらうつて。過呼吸になつて。ダメだよね？ 教師がそんなんじゃさ。でも、どうしても、

生で学生の顔を見るのが怖くて。私は、なんでここには立てて、大事な時にあの子の前には立ってやれなかったんだらうって。

耶麻 そんなこと……。

葵 あるよ。……許せない。大事な時に逃げたのよ。会ってはいけないうって周りの圧力で。同調圧力。わかってたはずなのに。……それで。どうにもうまくいかなくて。春休み、教頭とか、他の先生とも相談して、それ以来、ずっとこのまま。

耶麻 ……。

葵 ごめん。ごめんね。こんな話。

耶麻 ううん。分かるから。

沈黙がある。

緑 私知ってたよ。

葵 え？

緑 ふーん……。そんな感じだったんだ。

葵 ……なに？

緑 BlueSky123 って、葵でしょ？

葵 ……？

緑 なんか空のアイコンのやつ。あんたの「Twitter」よ。

葵 ……え？

緑 あとさ、私、多分その教え子も知ってるんだよね。「たまこたまこ」ちゃんでしょ？

葵 (絶句する) ……！

緑 だいぶ前にさ、その子にフォローされて。んで私もしたら、あんたのアカウントが出てきて。

先生なのかなあとか思ってたら、ある時、葵って分かって。

葵 ……。

緑 懐かしーと思ってさ。気付いてなかった？ まあ、私も誰か分かんない名前だから、知らないと思うけど。

葵 どういうことよ？

緑 声かけようかとも思ったんだよ？ けどどなんか……。私たち、向こうではそんなに仲良くないじゃん。

葵 信じられない。

緑 たまこちゃんと私、一回だけ話したことがあるんだ。ちよつとだけ。

葵 え？

緑 その子がね、「またいる。。。」って、呟いたことがあってね。ハッシュタグ黄色い飛行船って。外見たら私のところからも見えて、「私も見つけました」ってコメントしたの。そしたら、「怖いですよね」って。「なんで？」って聞いたたら、私のところにメッセージが来た。

緑は空を見上げている。

緑 その子やたらよく見かけるんだって。飛行船。何気なく空を見上げたら、目の端にふっと浮

かんでいて。遠くのことかもしれない、近くのことかもしれない。ポツカリ雲みたいに浮かんでるんだけど、追っかけられてるような気がして怖いって。その時は、あー、確かにねーって。あいつ何なんでしょうねーって、それで終わったんだけど。

葵 それいつ？

緑 去年の冬くらいかな？

葵 それだけ？

緑 それだけ。

葵 ……。

緑 最後のツイートさ。…覚えてる？

葵は緑の顔を見る。緑は、どこか別の場所を見つめたまま。

緑 スルーしてたんだけど、何日かしてふと、あれなんだったんだろうって。なんか引つかかるな。なんだろうって。そしたらそのツイートが大変なことになって。その子のフォロワーとか、調べてさ、読めば読むほど、ああ、多分この子死んじゃったんだって、分かって。…シヨックでさ。一回しか話したことないし。だけど、この何日間か、私、その子は生きてると思って過ごしてて。この子はもういなくなってるけど、私は、頭のどこかで彼女を感じたつもりになつてたんだ。

葵 ……。

緑 ああいう呟きってさ、その人が生きてる前提の言葉なんだなと思って。手紙とか、本とかと違うのよ。なんか、息とか、体温とかそういうものに近い。生々しいのよ。だけど、この子がいなくなっても、ネットの上にはこうやっていつまでもツイートや Facebook が残るんだ。指先で、生きてた頃の見れちゃう。

葵 ……。

緑 それが、いつまでも残ってるのが、怖い。この人、もういないのにつて。

葵 ……私が連絡した時も、じゃあ、全部知ってたんだ？

緑 うん。

葵 ……酷くない？

緑 ん……（肯定とも否定とも取れない相槌）。

葵 は？ ……え？

緑 だけどさ……。

緑は何か言いかけて、急に黙り込む。

葵 ……なに？ なによ、言つてよ！

しかし緑は沈黙を保ったまま。居心地の悪い時間がある。

緑 はっ……。全然ダメじゃん。6秒全く役に立たねえ。

葵 ……は？ え、なに？

緑 じゃあ、見る？

葵 え？

緑 私さ、たまこちゃんの周辺のフォロワーのツイート、まとめてグラフにしたの。

葵 は？

緑 エクセル。私、結構得意なんだよね。

葵 エク、エクセル!?

緑はスマートフォンフォルダを開いて2人に見せる。

緑 たまこちゃんの周辺の仲良さそうなフォロワーを5人選んでね、その人たちのツイートを、たまこちゃんの亡くなった日から、ずーっと調べていったの。

葵 なにそれ……。

緑 今見てるのが全員が一日だけ呟いたかをグラフにしていたもので、ほんでまあ、葵のツイートもここにまとめてあるんだけどね。ここがその子の事件があったところで、その前後のツイートの数。

葵 ちよっと待って。なに？ なにこれ？

緑 5日分の5人のツイート。全部調べたの。

葵 だから、なんでそんなこと？

緑 すごくない？ こうやって。ほら。

耶麻 うわ。

緑 でしょ！ これで見ると、事件の直後からガクンとツイートが減ってる。で、大体1ヶ月くらい経った頃からちよっとずつ何日かおきに始まって。ね？ 3月くらいには大分戻ってきて、4月からかなり増えるの。そこからは横ばいか、増える感じ。

耶麻 葵のツイートが4月から増えたのは、休職したからだろうね。

緑 あそうか！

耶麻 (耶麻は緑からスマートフォンを受け取って、データを見ながら) でも。他の人の波形もほぼ同じ感じだね。なるほど……。これ、有意差は取ってないの？

緑 何それ？

耶麻 統計上意味のある増減か計算すればわかるよ。

緑 統計とかわからないから。

耶麻 確かにこれを見ると、仕事辞めてから葵のツイート数はほぼ事件前と同じ水準に戻ってる。というか増える。

緑 あのね、ポジティブな内容かネガティブな内容か色分けしたやつもあるんだけど。

耶麻 見せて。

葵 やめてよ！

2人は葵を見て会話を止める。

葵 なにこれ？

緑 ……。

葵 なにしてんの？ 気持ち悪いんだけど。
 緑 別に葵を攻撃したかったんじゃないよ。
 葵 してるよね？
 緑 どこが？ 自分で書き込んだことでしょ？
 葵 何がしたいの？
 緑 別に。
 葵 え？
 緑 暇つぶしよ。
 葵 ……はあ？

葵の言葉を遮るように音を立てて強い風が吹く。焚き火の火勢が削がれ、おにぎりのセロファンが飛ばされる。

耶麻 あ！

耶麻はそれを取ろうとするが、指をすり抜けてセロファンは森の闇の中に飲み込まれる。
 飲み込まれた先の闇は、まだ風でざわめいている。
 3人は飛ばされたゴミが消えていった闇を見つめる。

葵 暇つぶし？

沈黙。緑は闇を覗いたまま。

緑 グラフばっかじゃん。最近。
 葵 ?
 緑 今日の感染者がどれくらいとか、どこの国で何人死んだとか。GDPがどうか。
 葵 話変えんなよ。
 緑 腹立たない？
 葵 ?
 緑 上から目線でき。科学的にとか。命を最優先にとか。
 葵 なに言ってるの？
 緑 私、今無職なのよね。
 葵 なんの話？
 緑 副業してたの。「接待を伴う」店。バレて職場に居られなくなってさ。
 葵 えー。…あそう。
 緑 (笑って) 自業自得って？ その感じ。

葵 え？

緑 葵はいいんだって、バイトなんかしなくて。私らはさ、昼の仕事だけじゃ貯金もできないの。知ってる？ 私の給料。みんな必死。なのになんも困ってないやつらが数字並べて、私らをバイ菌みたいに言うのよ。

葵 そんなことないでしょ？ 言いがかりじゃん？

緑 は？

葵 子供みたいなこと言って、仕方ないでしょ？ 今の状況考えなよ。

緑 ……「Twitterでもそうだけど、葵さ、言うことだけは清廉潔白よね？」

葵 ……。

葵は立ち上がり、緑の胸ぐらを掴む。

緑は手を出さずに、葵を睨みあげる。

耶麻 ねえ！

2人 ……。

耶麻 ねえって。

緑 ……なによ？

耶麻 (緑のエクセルを見ながら) こ、このフィルターは何なの？

緑 ええ？

葵 は？ 緑？

緑 いいから。

耶麻は緑に画面を突きつけて、聞く。

緑 え、えーっと……ああ、発言の内容がネガティブとポジティブで分けられるようになってるの。

「1」がポジティブで「2」がネガティブ。

耶麻 (やってみて) ……あー。

葵 え、なに？

耶麻 いや。その……、乖離が、ね、あるなって。

葵 カイリ？

耶麻 実際のこととき、こういう数字って。うまく言えないけど、本当じゃないよなって。

葵 なにが言いたいなの？

耶麻 これ見たら、確かに葵は今年の春には完全に元の水準に戻ってて、そこからはフェイクだ
って思うよ。

葵 え？

耶麻 (制して) だけど、だけどさ、実際は全然違うよ。人がさ、女の子がさ、一人亡くなったんだもん。葵だって、傷ついたまんまだよ。

葵 ……。

耶麻 そうでしょ？

耶麻は緑にスマホを差し出す。
 緑は受けとる。
 葵も手を離す。

沈黙。

耶麻 緑のやったことはさ、はっきり言って気持ちよくないよ。だけどさ、緑だってそういう数字が、実際とも違うって、分かりたかったんでしょ？

緑 ……。

耶麻 (葵に向き直って) 私も大事な気づきを得たよ。

葵 (構えて) ……なによ？

耶麻 いや。私の研究も、こういうの見てるのかも知らない、って。

葵 え？

耶麻 うん。

葵 ん？ え、今その話？

耶麻 数字って怖いね。私の研究も、こういうの見てるのかも知らない。

緑 (小声で) オルガノイド。

葵 あんたらねえ……。

火が爆ぜて、火の粉が舞い上がる。火の明かりで、3人の顔が照らされる。この暗闇の中には3人しかいない。3人が黙ったことで、森の静けさが増したような気がする。切れた会話の糸口を失い、3人はそれぞれのスペースに腰を落ち着ける。

緑 あの、そういえばさ、さつき耶麻と話して、私たち小屋には入らないことにしたから。

葵 はい、どうぞ。……え、耶麻も？

耶麻 や。私はちよつと狭いところ苦手で。

葵 いやいや。せめて横になれる方が良くない？

耶麻 大丈夫。

葵 もっと寒くなるかもしれないし、小屋の中で身を寄せ合ってたほうがいいって。

緑 私とも？

葵 あんたは外でしょ？ 耶麻と2人。

緑 ひどーい。

葵 (耶麻に) というか、外の方が平気なの？

耶麻 え？

葵 ……怖くない？ この森。

耶麻 ……え？

3人は、改めてドキリとする。

葵 薪拾いに行ったとき、なんかゾツとして。

耶麻 ……。

葵 ざわめき？ 森に入ったらさ、雨降ってきたのかと思って。さっき、薪探してる時ね？ カサ、パチって。本当に雨粒が落ちるみたいな音。するの。降ってないのよ？ あれ多分、ちっちゃい虫とか生き物が、山のようにいるんだろ？ そういう奴らがちよつとずつ音を出してて、一つずつは聞き分けられないけど、それが無数に重なることでザワメキみたいに感じるとていうか。暗がりには何かいっばいいるっていうか。

2人 ……。

葵 私だけ？

3人は、それぞれ思い当たる何かを感じとる。

緑 ……やっぱり私も入ろうかな。

葵 いや、アンタはいいよ。

緑 ごめんてば！

葵 許さん！

ガサリ。ガサリ。

3人 ！

3人は飛び上がる。

ガサリ。ガサリ。

3人 (耳を敲たせる) ……。

闇の中から音がする。

それは最初、なんの音か分からないが、やがて足音のように感じられ始める。

3人 ！

緑 ……なに？ なになになに？

足音はどんどん数が増えてくる。

人の足音とも違う。それはもつと密やかな音だ。

しかしそれは、闇の中からこちらに向かってくるのがわかる。

葵 あれ！

緑 なに！

葵 (指を指しながら) なんかいいる。

緑 (見つけて) ひっ！

葵 動物？
緑 なに？ 人？
耶麻 ……よく見えない。

3人は、目を凝らす。
何匹かの大型の動物がゆっくりと徘徊している。彼らは3人に注意を向けるわけでもなく、悠然と草を食んでいるようだ。彼らは一定の距離を保ち、3人の方によってくることはない。

緑 ……え、なに？
耶麻 分からない。
葵 怖い。
緑 急になんで？
耶麻 通り道とか？ 縄張り。
緑 え、メツチャいるよ？
耶麻 うん。

彼らの鼻息や、枯れ葉を踏みしだく音、草を咀嚼する音も聞こえる。

耶麻 囲まれた。
葵 ねえ。
緑 なに？
葵 あれ、普通の動物だよ？
緑 は？
葵 良く分からないけど。

3人はもう一度闇を覗き込む。そこには確かに何か大きな生き物が蠢いている。しかし、どうしてもそれを見定めることはできない。
彼らは草をかき分け、ゆっくり歩く。彼らは3人を取り囲んでいる。

緑 肉食じゃないよね？
耶麻 熊は群れない。
葵 祟り神？
緑 ばか！
耶麻 あ。
葵 え？
耶麻 あれ…こっち見てる。
2人 え？
耶麻 あいつ、ほら。
緑 どれ？
耶麻 あの、一番大きいやつ。

緑 なんでもわかるの？

耶麻 ……首を上げて。ほら。ずっと動かない。見て。

辺りは妙に静かだ。

緑 そうかも。

葵 なんでもこっち見てるの？

耶麻 ……あれ？

3人は違和感に気が付く。

耶麻 あいつだけじゃない。こっち見てる。みんな。みんなこっち見てる。

いつの間にか、全ての動物が歩みや食事をやめ、3人の方を見つめている。

彼らの目がどこにあるのか分からないが、彼らが注意を3人に向け、静かに佇んでいるのが分かる。

先ほどまで彼らが発していた音は失われ、静寂が辺りを包む。

3人もそれぞれ、闇の中を見つめ返す。

森の中で、3人と動物たちの、奇妙な緊張のバランスが出来上がる。

闇の中で佇む動物たちは、皆、誰かの言葉を待っているようにすら感じられる。

一定の時間が経過する。

耶麻 私もさ。いたんだ、あそこに。

耶麻は闇を見つめたまま、話し始める。

耶麻 普段なら絶対に行かないのにね。去年はベトナムとかミャンマーの留学生を連れて行かないやいけなくて、私が引率させられたの。

焚き火のはぜる音。

耶麻 暑かったよね。暑かったんだ、蒸し暑い。Tシャツがべったり張り付いて。そういう日で、まあそれでも楽しかった。留学生すごい喜んでたし、久しぶりに近くで花火見れて、まだ耳鳴りが残ってるくらい間近で花火の音を聞いて。警察に誘導されながら氷河みたいにゆっくり駅に向かった。そしたらね、ドーンって音が。少し離れた後ろの辺でして。キャーみたいな悲鳴？ 聞こえたような気がして。辺りはガヤガヤしていたけど、一瞬警察のアナウンスも止まって、静かになって、なんだ？ みたいな。今なんか音したよね、そんな話がポロポロと聞こえて。ま、私は暑くて鬱陶しくて、もうすでにイライラしてたんだけど。そしたらもう一回、ドーンで。今度ははつきりと。明らかに地面が揺れて。花火とは全然違う。腹に響く。悲鳴も聞こえて。一気にさっと背中が寒くなった。沢山の悲鳴と、怒鳴り声がわっと盛り上がった。

そこからは頭真っ白。留学生も私も、とにかく音のした方から逃げ出したくて。だけど、全然動かないの。それより後ろからどンドン押されて。

まるで時が止まったようだ。

耶麻 すごい力なの。信じられないような力。万力で指を潰されてるみたいなの、そういう容赦ない感じの硬い力。身体なんて一ミリも動かせない。岩に閉じ込められてるみたいなの感じ。小さいからさ、何にも見えないの。首も回せなくて。なにが起こってるのかも分からない。叫んだ。本当に、このままここで押し潰されちゃうかもしれないと思って。そのうち地面から足が離れて。浮いてるのよ？ 人に押されて。本当に怖くて。必死で身体を振ってたら、ふつと肩から上が、上に抜けたの。

耶麻の目には、焚き火の焰が映っている。

耶麻 火柱が見えた。ビルがオレンジに反射して、真っ黒な煙が後ろの道から朦々と立ち上がって、ずっと上まで伸びてた。一面に続く人の頭の世界。巨大な煙。煙はまるで狼煙みたいだった。嵐の海に投げ出されて、真っ暗な水の中振り回されていたのが、パツと海面に出たみたい。音を立てて息を吸い込んだ。一瞬なのにもすごく長い。すぐに痛みが戻ってきて。胸が押し潰されそうで。叫んで、殴って、殴り返されて、宙に浮いたまま辺りを蹴って。突然、グラッとバランスが崩れた。急に体が軽くなって、前方に倒れ込んだ。地面が無くなったみたい。私も誰か知らない人の上にそのまま倒れ込んで。後ろからどンドン人が被さってきて。凄い音を聞いたの。「ゴキッ」て。自分の骨が折れたんだと思った。本当にはつきりものすごく重たい音がして。聞いたこともない恐ろしい悲鳴が響いた。それで、それが誰かが押し潰された音だったんだって分かって。その間にも必死に足を引き抜いて、頭か背中か踏みつけて、もう石か何か踏みつけるみたいに。

少し炎が風で揺らぐ。

耶麻 道の端にたどり着いて、ちょうど低めの壁があって、どうにかその上によじ登って。やっとならりを見渡すことが出来た。火の手が上がってる辺りでは、何人か人が倒れていた。そこから人で埋め尽くされた道路。……でもね、所々に、十円ハゲみたいな穴が空いてるの。何だろって思ってただけで、それがさつきみたいに集団で人が倒れ込んでる部分なんだって気がついて。直感的に、あの一番下には、身動き取れずに押し潰されてる人がいるんだと思って。息なんてできない。声なんてあげられない。押さえ込まれたまま、静かに、沢山の人の体重の下で、信じられないような力に抗いながら硬い地面に押しつけられてるんだって。私もそこにいたかもしれない。逆に、私が誰かを押さえつけていたかもしれない。ゾツとして。涙が出てきて。

夜の音が戻ってくる。

動物たちは何事もなかったかのように草を食み、ゆっくりと移動している。

3人は押し黙っている。

耶麻は、水筒を開けて音を立てて水を飲む。

耶麻 私さ……、私……私、ただそれを見ていて。見ることしかできなくて……。

耶麻は、もう言葉が続かない。

辺りが急に明るくなる。木々の向こうにあった月が、高度をあげていよいよ3人を照らし出したのだ。

明るくなったことに3人も気が付く。

耶麻 ……。

葵 ……。

緑 ……。

月明かりに照らされて、鹿の群れが草を食んでいるのが見える。どの鹿も、もはや誰も3人のことを気にしていないようだ。

緑 鹿だった……。

葵 ……月？

緑 木の向こうから出てきたのね。

耶麻 ……綺麗。

緑 ん。

耶麻 (深く息を吐いて) ……すごく綺麗。

鹿の群れはゆっくりと移動し、やがて森の奥へと消えていく。

緑 ……耶麻は。怪我とか、大丈夫だったの？

耶麻 うん。擦り傷とか打撲くらい。

緑 そうか。

耶麻 その後逃げ出した留学生を探すのに、物凄い苦労したんだけどね。

緑 日本嫌いになっちゃったんじゃない？

耶麻 うん、一人国に帰った。けど、日本もテロあるんだって、ケロっとしてる子もいる。

葵 強いな……。

沈黙。

緑 ……言えよ。

耶麻 言えんよ。

葵 そうね。でも、……会えてよかったよ。直接聞けてよかった。

緑 うん。

耶麻 実際さ、今回のこのウイルス、厄介だけど、それ自体はSARSみたいな強いウイルスじゃないんだよ。

緑 そうね。

耶麻 私さ、人間で、どんなに理性的に装っても、結局感情の生き物だと思って。葵 なに？

耶麻 あのテロもそうだけど、犯人はたった一人でそれ自体はみんなを取り押さえれば余裕で勝てるくらいのテロだったのに、結局、恐怖に駆られてみんなパニックになって、群衆雪崩が起こつてさ。一番弱い人たちが押し潰されて沢山亡くなつて。だけど、今も私たち、その雪崩の始まりに立ってるんじゃないかって。

緑 やめてよ。

耶麻 あたしもだって。この状況じゃ、次の任期も雇ってもらえるか。

葵 それなら私もだ。

緑 無職のムーちゃんよりマシだって。

葵 仕事、見つかりそうなの？

緑 ……私ね、今、ライブチャットとか、オンラインキャバ嬢やってんの。

耶麻 ライブチャット？

葵 なにそれ？

緑 パソコンの前に座って、自分映してさ、チャットルームに入ってきた人とトークして、お金もらうの？

耶麻 そんなことが成り立つの？

葵 ねえ、それって……。

緑 大丈夫。私のやつはギリギリアダルトじゃないから。

葵 ギリギリってなに？

緑 ちょっと露出高め？

耶麻 え、そういうこと？

葵 やめなよ、そういうの。

緑 優しいな。

耶麻 緑だったら、私、一緒に住めるよ？

緑 プロポーズかよ！ 大丈夫。2人が思ってるほど変なことしてないから。なんだったら、私でも意外と需要あるじゃんって。

葵 本当にいいのね？

緑 就活もしてるよ。

月が3人を照らしている。

緑 ねえ。それで葵、なんか最初に言ってたスペシャルイベントって何なの？

葵 え？

耶麻 ああ。そういえば。

葵 もういいんじゃないかな？

緑 なにがよ？

葵 タイミング的に今じゃないというか。

緑 は？

葵 うわー、覚えてたんだ。

緑 いや。むしろイベントも用意してるから集まろう、みたいな話だったじゃん。

葵 やめとこ。

緑 今更なによ。

葵 マジで？

緑 ほら。

葵 ー、ええ……これですね。

葵はカバンから、銀の水筒のような見慣れないものを取り出す。

緑 なにそれ？

葵 ……タイムカプセルっすね。

緑 え？

葵 や。なんか、こうかつての友人と語りあつた後、これからの抱負とか夢みたいなの書いて、埋めたりしたら楽しいかなと思って。これ、埋めて10年後掘り起こせます。

緑 キモ！

葵 キモい言うな。

耶麻 そうだったんだ……。

緑 危うく葵埋めるとこよ。

葵 それ掘り起こされないよね？

耶麻 うん。無いね。

葵 耶麻まで。

緑 まさかだわ。

葵 こんなふうになると思わないじゃん。

緑 えー？ ちよ、見せて？ (タイムカプセルを受けとる。叩いたり確認する) いくらくらいするの？

葵 〇万ちよい。

緑 え！

葵 もー。

微かに地鳴りのような独特な低音が辺りに満ちている。

緑 ？

緑だけが、音に気づく。

緑 あれ？ (よく音を聞く)

葵 なに？

緑 嘘……。
葵 どうしたの？

緑は顔色を変えて隠れるところを探すが見つからない。驚くほかの2人。
結局、緑は小屋にも入れず、入り口近くに蹲って、頭の上にカバンを掲げる。

葵 なにやってんの？

耶麻 緑？

緑 追っかけてきた。

葵 ちよつと。

耶麻 どうしたの？

緑 黄色い飛行船よ！

耶麻 え？

葵 さっき言ってたやつ？

葵と耶麻は空を見上げるが、上空にはなにもいない。

葵 なにもいないよ？

緑 音がするでしょ？

葵 音？ ……しないよ？

緑 え？ してるよ。

葵 ？ ……（耶麻を見る）

耶麻 （首をかしげる）

葵 しないって。

緑 そんなはずない！ よく聞いてよ？

葵 だって……。

一瞬の間。

耶麻 ……あれ？

葵 え？

耶麻 ……この、低い地鳴りみたいな音？

緑 それよ！

葵 耶麻まで。いや、聞こえないって。

緑 ……ここまで来てもダメなんだ。

葵 なによ。

緑 私ね、最近どこ行っても見かけるの。黄色い飛行船。

葵 気のせいだって。

緑 違う！

葵 緑。

緑 あかね。ネットではさ、この飛行船、何かの象徴じゃないかって言われてて。

葵 ？

緑 一種の共同幻想？ 見てはいけないもの。気付いてはいけないもの。実はこれって、ずっと私たちの頭の上に浮かんでるんじゃないかって。

葵 馬鹿馬鹿しい。

緑 私はね、でもこれ、自分に見えるんだ。

葵 え？

緑 たった独りでぽっかり浮かんで。どこにも繋がってない。みんなに見上げられて、見られてるのに、誰も眺めてるだけ。巨大に膨らんで今にも弾けそうで。死にかけて魚みたいに浮いてる。

葵 考えすぎよ。

緑 たまこちゃんのツイートにも、幾つも飛行船の話題あったのに。あんたなんで、全部忘れちゃったの？

葵 ……私、知らないよ。

緑 ……頭がおかしくなりそうよ。

葵 緑。

音がゆっくりと近づいてくるような気がする。

緑は耳を塞いで蹲る。

耶麻 じゃあどうするの？ このまま、感情に任せて縮こまっているの？

葵 耶麻。

耶麻 もうしょうがないじゃん。こうなったらさ。

緑 うるさい！ やめてよ！

耶麻 一緒に見よう！

緑 ……え？

耶麻 見てやろう。なにが浮かんでいるのか。

緑 ヤダよ。ヤダ。

耶麻 どこにも飛んでいかないように、私が手を繋いでるから。

耶麻は緑のそばにしゃがんで、緑の手を握る。

緑 嫌だよ。いつか私も一緒に吸い上げられて、あそこに吊るされそうな気がするの。

耶麻 絶対大丈夫。

緑 ……耶麻だつてめっちゃ手冷たいじゃん。

耶麻 私も怖いよ。

少しして葵も緑も隣にしゃがみ込み、手を握る。

葵 私もいるわよ。

緑 ……めっちゃあったかい。

葵 冷えすぎでしょ。

緑 ……ねえ。ごめん、葵。私、あの時は、本当に全部が憎らしくて……。

葵 今はいいいから。

耶麻 コンパスは狂ってる、地図は落書き。

緑 え？

耶麻 昔見た古い映画のセリフ。

緑 何で今？

耶麻 なんかね。ほら。いくよ？

緑 怖いよ。

耶麻 きつと大丈夫だから。

音はどんどん近づいてくる。

3人は手を繋いだままそれぞれのタイミングでゆっくりと空を見上げる。
地鳴りのような低音がどんどん大きくなり、ふと月影が陰る。

唐突に闇。

闇の中、音だけが長くいつまでも残る。

FIN

※ 作品を上演する時には、作者の河合穂高に連絡を下さい。(genome.kawai@gmail.com)